

山河哀号

麗羅

麗羅

山河哀号

麗羅(れいら)

本名鄭竣汶。大正13年朝鮮慶尚南道咸陽郡生れ。東京高工付属工科学学校卒業後、日本軍に入隊。復員後、米軍府中基地勤務。以後、不動産業など各種職業を経験。昭和48年5月、「ルパン島」の幽霊」で第4回サンデー毎日新人賞（推理部門）を受賞。他に「死者の柩を揺り動かすな」「倒産回路」（共に集英社刊）がある。

山河哀号

一九七九年八月二五日 第一刷発行

定価 九八〇円

著者 麗羅

発行者 堀内末男

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋二一五一一〇
郵便番号 一〇一

電話 出版部 二三〇一六三六
販売部 二三八一二七八

印刷所 中央精版印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁本はお取替えいたします

©1979 REI LA, Printed in Japan

0093-775013-3041

山河哀号——目次

第一章 関釜連絡船 7

第二章 明大講堂 30

第三章 地下拷問室 56

第四章 特別志願兵訓練所 83

第五章 八・一四の反乱 108

第六章 黒い爪 126

第七章 送葬歌の谷間
146

第八章 深層の亀裂
168

第九章 小頭無足
189

第十章 市民劇場
209

第十一章 破局への前進
229

第十二章 山河哀号
254

装画
香月泰男

山河哀号

第一章 関釜連絡船

一

約束の刻限は、午後九時から十時までだった。だが、一時を過ぎてゐるのに、林孝一は姿を見せない。成文英は四十階段の最上段に佇んで、林孝一を待った。

待ちくたびれて、じりじりした気分になっていた。

そこは伏兵山の東斜面にあたる。無数の民家が、まるで汚物にむらがつた蠅のように、山腹にびっしりとへばりついている一帯である。

宵のうちは、家々の灯火が星屑をふり撒いたように見えた。が、待つうちに一つ消え二つ消え、暗くなつてしまつてゐた。

文英は、両手をオーバーのポケットに入れたまま、体を港の方に向けた。風はないが、夜の冷気がひっそりとしのび寄つた。

陸と海は暗い静謐の中に封じこめられている。関釜連絡船が発着する第一棧橋、それに続く棧橋駅のあたりに、あ

まり明かるくない街灯が点っているだけで、物音ひとつ聞こえて来ない。

停泊中の船も多くないようであつた。黒々とした間隙を置いて、登牟多利岩と鵜ノ瀬の二つの灯台がゆっくりと点滅を反復し、影島や赤崎、牛岩里あたりらしい数個の灯影が、天空の果ての星のように揺れている。

どうして来ないのだろうか？ 文英は次第に不安になつてきた。

文英が待っていると知つたら、孝一は、何をおいても駆けつけるはずなのだ。

うまく連絡がつかなかったのか？ それとも何か事故でもあつたのか？

今日の待ち合わせは、孝一本人とじかに決めたことではなかった。しかし、彼の姉が、必ず伝えると約束してくれた。もし、孝一に何か事情が生じたら、姉が来るはずである。

文英は一週間前、孝一の姉にはじめて会つたときのことを回想した。

下関からの連絡船は朝釜山に着いた。その足で孝一を訪ねたのだが、そこが緑町の遊郭街の一軒だったので、文英はとまどつた。

黄色いチョコリに青いチマの、小柄な女が姿を現わした。三十前後だろうか、化粧が崩れて疲れた顔をしていたが、

孝一の面影があった。

「わたし、孝一の姉の丁順ていじゆんです。あなたのことは弟から色々聞いていました。東京では孝一がたいそうお世話になったそうで、ありがとうございます」

彼女は、学生服に角帽をかぶった長身の文英を見上げては笑んだ。

通された部屋は二階の四畳半で、日本式だった。客をたつた今帰したばかりの乱れた夜具がそのままになっていた。「こんな商売をしているので驚いたでしょう？」

丁順は悪びれなかった。夜具を隅の方に押すと、座布団を出して文英にすすめた。

「孝一の話では、あなたが釜山にお出でになるのは、十月の二十日ごろということでしたが……」

「ええ、一昨日の夜東京を発って、今朝連絡船から降りしました。本当はもっと早く帰ったのですが、東京でどうしても出席しなければならぬ用件があったものですから」

「それで、この次は何日ごろ釜山に来ますの？」

「十一月一日の朝咸陽かんようを発って、夕方には釜山に着きます。二日の朝の連絡船に乗るようにしますから、一日の夜、孝一君に会えるように連絡を取ってくれませんか」

「わかりました。弟もあなたに会えることを楽しみにしておりますわ」

孝一は数日前に、所用で釜山を離れたが、月末までには必ず帰るはずだ、と言った。

「では、十一月一日の夕方、ぼくがまたここへ来ましかう？」

「いえ、もうここへは来ないで下さい。ここはあなたのような学生さんの来るところではありません」

彼女は、一日の夜九時から十時までの間に、四十階段の上で待っていてくれれば、孝一を必ず行かせる、と約束した。

今日がその十一月一日である。文英は夕方釜山に着いた。釜山には文英の四番目の姉の玉伊ぎよいが、道庁職員の尹正秀いんしょうに嫁いで、宝水町ほうすいちょうの高台で所帯を構えている。

釜山で泊まるときは必ず姉の家にするのが、今夜は、栄町さかえまちの小ぎれいな旅館に投宿した。主人に頼んで酒と料理も準備してある。孝一に会ったら、一夜を語り明かしたいと考えていた。

文英は、東京に持って行く旅費や学費とは別に、千円の大金を所持していた。買いたい書籍があると、生まれてはじめての嘘を言って、父からもらった。孝一は辞退するだろうが、どうしても受け取らせるつもりだ。

孝一は、文英が二十年の生涯に得たたった一人の親友である。その姉が売春婦をしているのを、放っておけなかった。千円あれば、借金を返してきれいになれるだろう。

だが林孝一は来ない。十一時半が過ぎた。文英はやっと諦める気持になった。夜が明けたら緑町に行つて彼の姉、丁順に会うほかはない。

文英は四十階段を降^{くだ}つた。それでもなお気を引かれて、一段一段と数えるようにゆっくりと足を運んだ。

半分近く下りたとき、上の方から、「成さんですか？」と低い女の声が出た。

振り仰ぐと、今まで自分が行んでいた場所に、黒い影が立っている。孝一の姉だと思つた。文英は階段を駆け昇つた。

しかし見知らぬ中年の女性だった。黒っぽいモンペに同色の標準服を着ていた。

「成文英さんですね？」

彼女が念を押すように強い釜山訛りで訊ねた。

「そうです。成文英です」

「丁順さんの使いで参りました。私と一緒に来て下さい」

「孝一はどうかしたんですか？ どこに行くのですか？」

「私は何も知りません。ただ、あなたを連れて来るように頼まれただけです」

とにかくついて行くほかはなかった。

女は、伏兵山の裾を擁^{かか}るように巻いている間道を、南の方に向かった。ゴム靴を履いているようで、足音も立てない。並んでいる建物の軒端に身を寄せて、まるで妖精のよ

うに歩く。絶えず左右に気を配っている感じだ。

文英は数歩後に続いた。できるだけ靴音をさせないよう足を運びながら、心の中に不安がひろがっていった。

ところどころに街灯が点いているが、街は暗かった。今日は旧暦の九月十日だな——文英は唐突に思い出した。十日ならまだ西空に月が残っているはずだが、今夜は厚い雲が張りつめている。

本町に出た。

「影島の大橋を渡るのですが、そこでもし警官に訊かれたら、あなたは私の弟で、栄町の親類の家で今まで話しこんで、これから帰るところだと答えて下さい」

「判りました」

府庁前を過ぎて大橋を渡つたが、幸い人影には会わなかった。

「まだ遠いのですか？」

「もうじきです」

大橋のたもとに鉄工所があった。二人はその塀に沿つて左に折れた。小さな建物が並んでいて、道が狭くなった。ごみごみした露地を幾つも曲がって、一軒のみすぼらしい民家に着いた。

入口は暗く静まりかえっていたが、中に入ると、小さな電球がともっていた。部屋には丁順が待っていた。彼女も黒っぽいモンペ姿だった。

「文英さん」

立ち上がると、取りすがるように文英の手を掴んだ。

「孝一が死んだんです」

低くかすれた声だった。今まで泣いていたに違いない。息をのみ込んだまま文英は言葉が出なかった。

二

「弟は警察に殺されたのです」

「警察に？ どういうことですか？」

文英と丁順は、温突に膝をつき合わせるようにして坐った。

「この前、孝一が所用で釜山を離れていると言いましたね。あれは同志の人と小舟で済州島に行ったのです」

「同志の人と？」

「はい。孝一は自分と同じ日本軍の徴兵制が適用される青年たちと一緒に、中国の江蘇省の海岸へ密航する準備をしていました」

「……………」

「中国の重慶には、大韓民国臨時政府という亡命政府があって、独立軍を編成して中国と協同で、日本軍に抵抗しているのです。弟たちは、日本軍隊に取られるくらいなら、いっそ中国に渡って、祖国朝鮮の独立のために戦うつもり

だったのです」

「へそうだったのか！」

いかにも孝一らしい大胆な計画に思える。

「弟たちの舟は済州島の西端の慕瑟浦から出発する予定でした。そこから江蘇の海岸まで五百キロあります。一時間に十キロで走れば二日ばかりで着きます」

「うまく江蘇の海岸に辿り着いたとしても、重慶まではずっと日本軍が占領しているのに……」

「それも大丈夫だと言っていました。海岸へ亡命政府から出迎えの連絡員が来るし、日本軍が占領しているのは大きな都会と鉄道沿線ぐらいで、見つからずにくらでも奥地と往来できるそうです」

「孝一君たちのその計画が、警察に露見してしまったんですか？」

「そうです。弟は慕瑟浦での準備が終ったので、釜山に待機している同志たちを連れに、もう一人の同志と、一昨日の夜多大に戻ったのです」

「多大？ それはどこですか？」

「釜山から松島を過ぎて、二里ばかり西に行った小さな漁村です」

「……………」

「多大に着いたのは夜の九時ごろで、弟と同志の方はひそかに上陸して、釜山に通じる海岸線の間道を歩いたそうで

す。ところが、刑事が三人も待ち伏せしていたのです。孝一は同志を逃がすために、自分だけ踏みとどまって戦い、その最中に崖から海に落ちて死んだそうです」

文英は眼を閉じた。夜の断崖で三人を相手に格闘している孝一の姿を思い浮かべた。

「弟の死体は昨日の昼過ぎに、水上警察署に運ばれて来て、すぐにわたしのところに連絡が来たそうです。でもわたしはまだ、弟の死体とも会っていないのです」

「どうしてですか？ あなたが死体を引き取りに警察に行つてはまずいのですか？」

「弟が海に落ちた夜中、同志の方が緑町のわたしのところまで逃れて来ました。わたしのところが釜山での連絡場所になっていたのです。わたしは、弟が命を捨ててまで助けたその同志を、安全な場所まで案内しなくてはならなかったのです」

思わず文英は、頭を下げた。

この人は弟に学問させるために売春婦をしていただけでなく、弟の死という大きな悲しみを押し隠して、祖国のために働いている。

孝一姉弟の張りつめた糸のような生きざまに比べ、親の庇護の下でぬくぬくと安逸を貪っていた自分が、たまたまなく恥ずかしくなった。

「明日の朝になったら、ぼくが水上警察に行つて孝一君の

遺体を引き取り、手厚く葬って上げます」

「いいえ、そうする必要はありません。今さらどんな立派な葬式を出したところで、孝一が生き返るわけでもないし、孝一の友人だということが知れば、文英さんまで警察から睨まれます」

丁順がきっぱりと反対した。

「でもぼくは、自分のたった一人の親友を、警察の死体置場に放つておくことはできない。それにぼくのことなら心配ありません。警察にはそれなりのコネもあります」

「ありがとうございます。実は孝一を思つて下さるそのお気持ちに甘えて、もっと大事なことをお願いしたくて、わざわざ来ていただいたのです」

「もっと大事なこと？」

「はい。若い女性ですが、東京まで無事に連れて行つてもらいたいです」

「すると、その人は無論朝鮮の女性でしょう？ 東京まで連れて行くといつても、連絡船に乗るには渡航証明が必要ですが」

朝鮮と日本の間には海がある。これを渡るには、釜山・下関間の関釜連絡船か、麗水・下関間の関麗連絡船を利用する。どちらも日本人は無条件で乗れるが、朝鮮人は警察が発行する渡航証明書がないと乗船できない。

「証明書はちゃんと持っています」

証明書を持っているなら、東京まで連れて行くことなどいともたやすいことだ。

「その女性には丁良淑ていりやうしやくと言います。今年十九歳です。東京の向島区に住む都在千たいせんという男の人が今年の九月に一時帰郷をして結婚し、連れて戻ろうとしたのですが、都さんの証明の期日までに彼女の渡航許可が下りなかったのです」

「それで彼女だけが残ったんですね？」

「はい。このほどやっと彼女の許可も下りました。都在千さんには孝一が東京にいたときたいそうお世話になったそうで、妻の渡航許可が下りたら、誰か信頼できる人と一緒に日本に渡らせてくれと頼まれていたのです」

「おやういご用です」

文英は言下に承諾した。

「ぼくは今夜孝一君に会って、明朝の連絡船に乗る予定だったんですが、三、四日延ばしましょう。その間に孝一君の葬式を出してやれる」

文英はあくまで孝一の葬儀をするつもりでいた。

「それは絶対にいけませんわ」

丁順は強く制めた。

「丁良淑を無事に東京に連れて行って下さるだけで、どんな立派な葬式を出してくれるよりも孝一が喜びますわ。明朝予定通りに彼女と発って下さい。そのつもりで乗船券も準備してあります」

「その人を東京に連れて行くことが、そんなに大事なことでするか？」

「ええ、孝一やわたしにとっては。世話になった都さんへの恩返しですから」

「ですが……」

「そりゃ連絡船は毎日二度も出帆するし、乗船する同胞はいくらでもありますわ。しかし、もしもうちかりした人に頼んで、言葉も地理もわからない若い女の身に間違いがあっては、恩人の都さんに申し訳がありません」

若い女性を、親切ごかしに連れて行ってやると約束しては、日本に渡ってなぶり物にした上に、遊郭に売り飛ばしてしまうという話を聞いたことがある。

文英と孝一の交友は一年有余にしかならないが、都在千という人物にはもっと深い義理があるらしい。文英は明朝の立立を承諾した。

「そのかわりお姉さん、これだけはぜひとも受け取って下さい」

文英は上衣の内ポケットから紙包みを取り出した。十円紙幣が百枚包んであった。

「これを？」

丁順が眼をみはった。

「ぼくの自由になる金です。孝一君に是が非でも受け取ってもらおうつもりでした」

「あなたは、そんなにまで私や孝一のことを……」

丁順は両手で顔を覆うと、肩を激しくふるわせた。だが文英は、そんなことではまだ自分の負債を返し切れないような心の負担を感じた。

「孝一が別れを告げに来た——あのとき、おれは彼を制めるべきではなかったのか？」

文英は三か月前の夜のことを思い出して、苦い呵責を噛みしめた。

三

東京高輪の文英の寄宿先に林孝一が最後に訪ねて来たのは、八月二日の午後七時ごろだった。風のないむし暑い夜なのに、孝一は黒い冬物の学生服の上衣まで着ていた。顔が蒼白く、ひどく思いつめたようだった。

文英は二階の自室に招じ入れた。孝一はズボンの尻ポケットから、折りたたんだ新聞を出して突きつけると、

「先輩、明日ぼくは日本から逃亡します」

いきなり朝鮮語で言った。

まるで喧嘩でも仕かけるような口ぶりである。文英は呆気にとられた。

「日帝の悪魔め！ われわれ朝鮮人から祖国を奪い、奴隷にしなければあき足らず、今度は命まで取ろうとしてい

る！」

孝一は歯がみをしながら、両拳で激しく膝を叩いた。

「この男は、何をこんなに憤っているのか？」

文英は新聞をひろげた。朝日新聞のその日の夕刊だった。第一面の中央に、「朝鮮徴兵制あす実施 国防力を飛躍的に強化」という、二行四段抜きのような大きな見出しが眼に飛びこんだ。

「徴兵制施行にたいする半島同胞の熾烈なる要望は支那事変以来澎湃たる内鮮一体の気運として昂揚しとくに大東亜戦争勃発後における朝鮮同胞銃後の至誠は、献金にあるひは各種の銃後援護に強く表明されるに至つたので——」

日本政府は昨年（昭和十七年）五月八日の閣議で、「朝鮮同胞に対し徴兵制を施行し、昭和十九年よりこれを徴集し得る如く準備を進むること」と決定してあったが、その法律的措施として「兵役法中改正法律」が八月一日から施行され、大正十二年十二月一日以後に生まれた十七歳以上の朝鮮人男子は直ちに第二国民兵役に編入されること、そして大正十三年十一月三十日までに生まれた者は、明年度中に徴兵検査が実施され、徴集されることになったことが書いてあった。

記事では、この措置が決して日本側が押しつけたもので

はなく、朝鮮民衆の内から盛り上がった希求に応えたものであることを長々と説明し、「報国赤誠の念」とか、「涙ぐましいまでの至誠」「内鮮一体」などといった用語が書き並べてあった。

へだれが、祖国を日本に侵略されていることを喜ぶものか！ その侵略者の日本のために血を流すものか！

そんな人間がいたとしたら、それは朝鮮人ではない。

文英は我慢して最後まで読んだ。

「大東亜戦争下真に共栄圈確立の中核的指導者としての地位と働き場所を与へられたものであつて、朝鮮同胞の光栄と喜びは蓋し察するにあまりあるものがある」

文英は新聞を畳の上に置いた。顔を上げられなかった。急に大気の比重が増したような圧迫感を覚える。全身が重苦しく締めつけられるようだ。

日本は昭和十三年から朝鮮に特別志願兵制度を実施してきた。名ばかりの志願兵制度で、実態は脅迫まがいの募集だったが、それでも信念さえ強ければ逃れることができた。だが徴兵制になると絶対に逃げられない。何時かはこうなるものと予測していたつもりだったが、眼の前に決定として突きつけられると、すっかり忘れていた古い借金を、改めて請求されたような気分になった。

文英は大正十二年の三月八日生まれだから、除外される。だが少しも救われた気にはなれなかった。故郷には従弟や再従弟など、親族でそれに該当する者が多い。それに、肉親の弟よりも親愛感を持っている孝一も該当する。

孝一の生年月日は大正十二年の十二月十五日だった。本当は一月早い十一月十五日生まれだが、彼が生まれる直前に父親が死んだ。父親は大正八年三月一日の朝鮮独立万歳闘争の参加者で、日本の警察に捕まって三か年の拷問と投獄の後に釈放されたが、そのときの傷がもとで死んだのだ。そのために出生申告が一月遅れた。

「先輩、ぼくの血の中には、日本に対する怨念が誰よりも濃く流れています。父は病床で、母の胎内で育つぼくに対して、せいっぱいの怨みを吹きこんだと思います」

孝一は、自分の戸籍上の出生日が、実際よりも一月遅い事実を大事にした。

「ぼくが生まれたとき、たった一人の姉は十歳でした。子供が生まれても、日本の警察に睨まれている家だから誰も気をつかってくれず、一か月後に産後の肥立ちの悪い母が、やっとのことで面事務所（役場）に出頭して、出生申告と父の死亡届を同時にしたそうです」

その母も彼が四歳のときに死んだ。彼を育てたのは数え年十三歳の姉の丁順だった。

彼が大事にしていた一か月遅れの出生申告が、皮肉な結